子どものレジリエンスと地域社会・過去の体験の関係

水　落　正　明

1．はじめに

近年，子どもの精神的成長・発達に関連してレジリエンス（resilience）という概念がよく登場する［小林 2021］。OECD（2019）も子どもの福祉の観点から，どのようにレジリエンスを構築していくのかなどについて報告しており，国内外において重要なトピックとなっている。レジリエンスの定義は，齊藤･岡安（2009）がまとめているように研究者によって様々であるが，広義には「困難で脅威的な状況にもかかわらず，うまく適応する過程・能力・結果」のことなどを指し，「精神的回復力」とも呼ばれる。すなわち，何かしら精神的に負荷のかかる出来事・状況などがあった場合，それを跳ね除けるあるいは耐える能力のことを意味している。こうしたレジリエンスは，日々ストレスにさらされ，さらには精神的には未熟である子どもの健全な発達において重要な一側面である。例えば，いじめによる不登校や直近の新型ウィルス感染症などによる日常生活の激変など，発達段階の子どもたちに悪影響を与える社会的な要因は数多い。レジリエンスを高めることで，こうした困難を克服し，健やかに成長することは，長期的な人格形成さらには人的資本形成の観点からも重要であると考えられる。

子どものレジリエンスと関連する要因について分析した研究は数多くあり，以下のようにレジリエンスを高めるものがいくつか明らかになっている。例えば小学生に関する研究では，偏食をしなかったり，運動をよくしたりするなどの良い生活習慣［榊他 2016］，先生に気持ちをわかってもらえたり，家族の期待にこたえることができたりといったうれしい経験［原・古田 2013］，自己理解を含む保健指導［原･古田 2016］，川や海で泳ぐことや植物の観察･調査などの自然体験活動［大谷･佐々木 2020］などが影響していることが明らかになっている。また中学生に関しては，コミュニケーションの難しさへの気付きや感情のコントールなどのソーシャルスキル・トレーニング［小林・渡辺 2017］，親や友達がはげましてくれるなどのソーシャルサポート［石毛・無藤 2005］，自己指向性や協調性などのパーソナリティ［石毛・無藤 2006］などに影響力があることがわかっている。最後に高校生については，栄養バランスに気をつけたり，運動をよくしたりするなどの良い生活習慣［服部他 2014］などに影響力があることが明らかになっている。より包括的な関連研究のサーベイは小林（2021）に詳しい。

こうした研究から，レジリエンスの向上につながるチャンネルが多く存在していることが明らかになっているが，さらに知見を積み上げることができると考えられる視点が 3 つある。第 1 は，地域との関わりという側面である。例えば，近隣住民とあいさつしたり，あるいはほめられたり注意されたり，地域行事に参加したりすることで，自分が理解されている，大切にされていると感じることはレジリエンスを高める可能性がある。近年は，こうした子どもたちをサポートする地域的な

力が衰えており，こうした点から子どものレジリエンスについて見ることは重要である。第 2 は，さらに下の世代（幼稚園児など）との交流など，どのような過去の体験が，その後のレジリエンスに影響しているかという点である。子どものうちは，様々な体験をするには大人の許可や監視が必要であり，自由に選択できるとは言えない。したがって，どのような体験が，その後の子どもの発達にポジティブに影響するかを把握しておくことは，それを導く側の大人にとって必要なことであろう。第 3 に，小学生，中学生，高校生でレジリエンスに影響する要因がどう異なるのかを比較した研究が見当たらないことである。これには，発達段階によってレジリエンスの尺度を異なるものにする必要があることなどが考えられる。しかしながら，統一的な尺度を使い，発達段階によってレジリエンスに影響する要因がどう異なるのかを明らかにすることには，子どものたちの効率的なレジリエンス向上のために必要な知識であると考えられる。

そこで本研究では，地域との関わりや過去の体験が，小学生から高校生までの子どもたちのレジリエンスにどのような影響を与えているのか，データによる比較分析を行う。検証する仮説は以下のとおりである。

仮説 1a：地域との関わり（地域の人とあいさつしたり，地域の人からほめられたりすること）は，子どもたちにとって自分が大切にされていると感じる経験となるため，子どもたちのレジリエンスを高める。

仮説 1b：過去の体験（小さい子どもとの交流や地域の行事への参加）は，様々な経験を通して積極的に物事に取り組む姿勢が育まれるため，子どもたちのレジリエンスを高める。

仮説 2：レジリエンスに影響する要因は，発達段階（小学生，中学生，高校生）によって異なる。

この仮説検証に使用するデータとして，三重県で 2018 年に行われたアンケート調査を使用する。この三重県のデータは小学生，中学生，高校生に対して基本的に同じ質問をしており，発達段階間の比較分析を行うことができる設計となっている。また，地域との関わりや過去の体験についても調査しており，本研究の目的に適したものとなっている。

2. 分析方法

2.1　データ

本研究では，三重県子ども・福祉部少子化対策課が 2018 年 7～8 月に行った県民に対するアンケート調査の個票データを使用する。この調査では，子ども調査として小学 5 年生，中学 2 年生，高校 2 年生を対象にアンケートを行っている[1)]。小学 5 年生については，市町ごとに市町立小学校 1 校ずつの計 29 校，県立特別支援学校 3 校，私立小学校 1 校を対象として調査が行われ，有効回収数は 1425 となっている。中学 2 年生については，市町ごとに市町立中学校 1 校ずつの計 29 校，県立特別支援学校 3 校，私立中学校 1 校が対象として調査され，有効回収数は 1871 である。高校 2 年生については，県立高等学校 11 校，県立特別支援学校 3 校，私立高等学校 1 校が対象として調査され，

1）　子ども調査の他に保護者調査（調査対象の小学 5 年生と中学 2 年生の保護者）と県民調査（29 市町の選挙人名簿から無作為抽出された者）が行われている。保護者調査については，子どもとの紐づけ情報は得られないため，今回の分析では子どもと親の回答を結びつけた分析はできない。また，小学生と中学生の調査では，各市町の児童生徒数に応じた対象数となるように抽出されている。

有効回収数は 1299 である。後で行う回帰分析においては，従属変数および独立変数に欠損値がある場合を除くため，最終的な分析対象数は小学生 1225，中学生 1675，高校生 1202 となった。

子ども調査の内容は，子どもの生活習慣や地域との関わり，過去の体験，自己肯定感，規範意識，大人との関係，結婚観や男性の育児参画に関する考え方など，多岐にわたる。さらに，小学生，中学生，高校生でほぼ同じ調査項目になっており，比較分析を行うのに適している。調査結果の詳細については，三重県子ども・福祉部少子化対策課（2019）を参照されたい。

2.2　従属変数

本研究の従属変数はレジリエンスであるが，本研究で使用する子ども調査は，子どものレジリエンスを測定することを目的とした調査ではない。しかしながら，以下で見るように，いくつかの質問はレジリエンスの指標として使っても良いと考えられる。

多くの先行研究では，レジリエンス尺度として小塩他（2002）の提案したものが使用されている［例えば，榊他 2016；服部他 2014；原・古田 2013］。この尺度は 21 個の質問に対する回答の合計得点によって作成されており，質問項目として「色々なことにチャレンジするのが好きだ」，「新しいことや珍しいことが好きだ」，「自分の将来に希望をもっている」，「自分には将来の目標がある」といった新奇性や肯定的未来志向などを計測するものが含まれている。本研究の子ども調査の問 17「新しいことにチャレンジすることは好きですか」と，問 18「あなたには，夢や将来の希望がありますか」は，こうしたレジリエンス尺度の構成要素として該当すると考えて良いだろう。

その他の先行研究でのレジリエンス尺度では，「自分のことが好き」という自己受容や，「私の考えや気持ちをわかってくれる人がいる」という他者信頼感を計測する項目が含まれているものもある［例えば，Hiew et al. 2000；田中・兒玉 2010；森他 2002］。したがって，本研究の子ども調査の問 3「あなたは，家の人（兄弟姉妹は含みません。）と学校などでの出来事について話をしていますか」，問 4「あなたは，困ったことや悩みがあったとき，家の人（兄弟姉妹は含みません。）に話をしていますか」，問 5「家の人（兄弟姉妹は含みません。）は，あなたの仲の良い友達の名前を知っていると思いますか」，問 12「あなたは，家庭や地域，学校などふだん生活しているなかで，大切にされていると感じますか」，問 13「あなたは，親（保護者）などの大人は，自分のことをわかってくれていると思いますか」，問 14「あなたが自分のことを決めるとき，親（保護者）などの大人は，あなたの意見を聞いてくれますか」，問 16「あなたは，自分のことが好きですか」も，レジリエンス尺度の構成要素として使用しても良いであろう。

これらの質問に対する回答について，問 18 以外は，している，感じる，など強い肯定＝1，どちらかといえばしている，どちらかといえば感じる，など弱い肯定＝2，どちらかといえばしていない，どちらかといえば感じない，など弱い否定＝3，していない，感じない，など強い否定＝4 のようなコーディングとなっているが，強い肯定を 4，強い否定を 1 とするように値を反転して使用する。問 18 は，ある＝1，ない＝2 のコーディングになっているため，この指標についても値を反転させて使用する。すなわち，値が大きいほど，レジリエンス尺度の構成要素として，レジリエンスが高くなるようにして使用する。

これら 9 つの質問の回答を合計し，一つの指標に統合してレジリエンスの指標としても妥当性はあると考える。ただし，上で述べたように，レジリエンスの捉え方は様々あり，9 つの質問項目は異なるレジリエンスの側面を含んでいる可能性があるため，単純にこれらの点数を合計するのは問題があるかもしれない。そこで本研究では，主成分分析によって，レジリエンスに対して同じ方向

に作用している第1主成分を取り出して分析に用いることとする。

2.3　独立変数

はじめに，で述べたように，本研究では地域との関わりと過去の体験に注目するため，以下の独立変数を使用することとする。

第1に，地域との関わりである。これには，問19「あなたは，近所の人とあいさつをしていますか」，問20「あなたは，これまで近所の大人からほめられたことはありますか」，問21「あなたは，これまで近所の大人から注意されたことはありますか」，問22「あなたは，将来，自分が育った地域で住みたいと思いますか」の4つの質問を使用する。これらの質問に対する回答には4つの選択肢があるが，本研究では結果解釈を簡単にするために，肯定的な回答（よくある，ときどきあるなど）を1，否定的な回答（あまりない，ないなど）を0とする2値変数として扱う。

第2に，過去の体験についての質問を使用する。子ども調査の質問票の問11では，小学生には「今までに」として，中学生と高校生には「小学生時代について」として6つの体験について，どのくらいしたことがあるか質問している。具体的には（1）「赤ちゃんとふれあったこと」，（2）「小さい子ども（保育所や幼稚園などに通う）と遊んであげたこと」，（3）「山や森，川や海など，自然の中で遊んだこと」，（4）「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加したこと」，（5）「家の人と一緒にスポーツをしたこと」，（6）「家の人に勉強を教えてもらったこと」である。これらの質問の選択肢は4つあり，地域との関わりと同様に，肯定的な回答（何度もある，少しあるなど）を1，否定的な回答（あまりない，まったくないなど）を0とする2値変数として扱う。

その他に，子ども調査の質問項目の中で，家族との関係に関する問6「あなたは，家事や手伝いをしていますか」があり，コントロール変数として使用する（上記の変数と同様に肯定的回答を1，否定的な回答を0とした）。また，観察されていないが交絡要因となりうる社会経済状況や地域の特徴をコントロールするため，居住市町ダミーを使用する（推定結果の表では推定値は示さない）。なお，男女計の推定では女子ダミー（男子＝0，女子＝1）も使用する。

2.4　推定方法

先に述べたように，9つのレジリエンスに関連する質問の回答から，主成分分析で抽出された第1主成分である総合指標を従属変数として使用する。この主成分分析で抽出された総合指標を，本研究ではレジリエンス得点と呼ぶ。この従属変数は連続量であるので，通常の最小二乗法（Ordinary Least Squares）で推定する。なお，レジリエンス得点が高いほど，レジリエンスが高いことを意味するため，回帰分析の結果として，推定された係数が正になった場合，その要因はレジリエンスを高めると解釈することができる。

また仮説でも述べたように，発達段階によってレジリエンスに影響する要因が異なる可能性がある。そのため，小学生，中学生，高校生は個別のサンプルとして推定を行い，その推定結果を比較する。また，男女においても，レジリエンスと要因の関係は異なることが考えられるので，男女別の推定も行うこととする［石毛・無藤 2005］。

3. 分析結果

3.1 主成分分析の結果と記述統計

表１は，小学生，中学生，高校生それぞれの主成分分析の結果である。9つの質問文については，上で述べたものを少し簡略化している。いずれのサンプルにおいても，第１主成分の負荷量はすべ

表１ レジリエンス得点に関する主成分分析の結果（第３主成分まで）

小学生	第１主成分	第２主成分	第３主成分
家の人と学校などでの出来事を話す	0.31	−0.49	0.36
家の人に困ったことや悩みを話す	0.31	−0.49	0.29
家の人は仲の良い友達の名前を知っている	0.23	−0.21	0.06
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	0.40	0.13	−0.32
親など大人は自分のことをわかってくれる	0.42	0.05	−0.41
親など大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	0.38	−0.13	−0.32
自分のことが好き	0.36	0.32	−0.07
新しいことにチャレンジするのが好き	0.30	0.36	0.40
夢や将来の希望がある	0.22	0.46	0.50
固有値	3.03	1.12	0.96
寄与率	0.34	0.12	0.11
中学生	**第１主成分**	**第２主成分**	**第３主成分**
家の人と学校などでの出来事を話す	0.32	−0.39	0.46
家の人に困ったことや悩みを話す	0.33	−0.41	0.31
家の人は仲の良い友達の名前を知っている	0.31	−0.10	0.22
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	0.41	0.09	−0.32
親など大人は自分のことをわかってくれる	0.41	−0.08	−0.33
親など大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	0.37	−0.15	−0.33
自分のことが好き	0.34	0.34	−0.20
新しいことにチャレンジするのが好き	0.28	0.48	0.17
夢や将来の希望がある	0.18	0.53	0.51
固有値	3.60	1.13	0.97
寄与率	0.40	0.13	0.11
高校生	**第１主成分**	**第２主成分**	**第３主成分**
家の人と学校などでの出来事を話す	0.34	−0.37	0.41
家の人に困ったことや悩みを話す	0.38	−0.35	0.22
家の人は仲の良い友達の名前を知っている	0.31	−0.20	0.38
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	0.39	0.13	−0.30
親など大人は自分のことをわかってくれる	0.42	−0.11	−0.36
親など大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	0.35	−0.12	−0.50
自分のことが好き	0.30	0.41	−0.09
新しいことにチャレンジするのが好き	0.24	0.52	0.32
夢や将来の希望がある	0.22	0.47	0.24
固有値	3.41	1.24	1.03
寄与率	0.38	0.14	0.11

て正の値をとっており，各構成要素は，レジリエンスの高低に対して同じ方向を向いていることがわかる。すなわち，第1主成分はレジリエンスの総合指標として使用することができる。さらに，寄与率は0.34〜0.40とそれほど高くないものの，どのサンプルでも固有値は3.03〜3.60と1を大きく超えており，第1主成分はレジリエンス尺度として9つの構成要素からの情報を十分に縮約できていることがわかる。また，これもサンプル間で共通であるが，「親など大人は自分のことをわかってくれる」と，「家庭・地域・学校で大切にされていると感じる」の負荷量が高く，レジリエンス得点への影響が大きいことが示されている一方，「夢や将来の希望がある」の負荷量が最も低く，レジリエンスへの影響が小さいことがわかる。

回帰分析の前に，各サンプルの記述統計を示す（表2〜4）。いずれの表においても，上半分はレジリエンス得点とその構成要素となっている9つの質問の記述統計である。いずれのサンプルでもレジリエンス得点は女子のほうが高いことが示されている。また，これもどのサンプルでも共通であるが，9つの質問について大半は男子に比べて女子のほうが平均値が高く，女子のほうが肯定的な回答をしている割合が多いことがわかる。さらに，男子が女子を上回っているのは「自分のことが好き」と「新しいことにチャレンジするのが好き」のみであることもサンプル間で共通である。

表2〜4の下半分は回帰分析で用いる独立変数の記述統計を示している。項目名としては，2節

表2　小学生サンプルの記述統計（平均値，標準偏差）

	男女 N＝1225	男子 N＝604	女子 N＝621
レジリエンス得点	0.00(1.74)	−0.14(1.82)	0.14(1.65)
家族と学校などでの出来事を話す	3.28	3.08	3.48
家族に困ったこと・悩みを話す	2.91	2.78	3.03
家族は仲の良い友達の名前を知っている	3.65	3.61	3.70
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	3.31	3.28	3.34
親や大人は自分のことをわかってくれる	3.37	3.35	3.39
親や大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	3.46	3.41	3.51
自分のことが好き	2.94	3.01	2.87
新しいことにチャレンジするのが好き	3.37	3.39	3.36
夢や将来の希望がある	1.88	1.87	1.88
女子	0.51		
近所の人とあいさつしている	0.94	0.95	0.93
近所の大人からほめられたことがある	0.76	0.72	0.80
近所の大人から注意されたことがある	0.18	0.26	0.11
将来，育った地域に住みたい	0.75	0.75	0.76
赤ちゃんとふれあった	0.76	0.69	0.83
小さい子どもと遊んであげた	0.75	0.68	0.82
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.82	0.82	0.82
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.87	0.86	0.87
家の人と一緒にスポーツをした	0.78	0.81	0.76
家の人に勉強を教えてもらった	0.87	0.84	0.90
家事や手伝いをしている	0.78	0.73	0.83

（　）内は標準偏差。

表3　中学生サンプルの記述統計（平均値，標準偏差）

	男女 N＝1675	男子 N＝838	女子 N＝837
レジリエンス得点	0.00(1.90)	−0.17(1.97)	0.17(1.81)
家族と学校などでの出来事を話す	3.24	3.07	3.42
家族に困ったこと・悩みを話す	2.75	2.57	2.93
家族は仲の良い友達の名前を知っている	3.57	3.50	3.63
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	3.20	3.15	3.25
親や大人は自分のことをわかってくれる	3.16	3.15	3.17
親や大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	3.45	3.39	3.51
自分のことが好き	2.60	2.70	2.50
新しいことにチャレンジするのが好き	3.19	3.22	3.16
夢や将来の希望がある	1.72	1.70	1.74
女子	0.50		
近所の人とあいさつしている	0.93	0.92	0.94
近所の大人からほめられたことがある	0.72	0.69	0.76
近所の大人から注意されたことがある	0.20	0.25	0.14
将来，育った地域に住みたい	0.62	0.61	0.62
赤ちゃんとふれあった	0.64	0.57	0.71
小さい子どもと遊んであげた	0.67	0.59	0.76
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.79	0.81	0.76
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.78	0.76	0.80
家の人と一緒にスポーツをした	0.69	0.68	0.69
家の人に勉強を教えてもらった	0.68	0.63	0.72
家事や手伝いをしている	0.66	0.62	0.70

（　）内は標準偏差。

で示したものから少し簡略化したものを表記している。小学生サンプル（表2）では，ほとんどの独立変数について女子のほうが肯定的な回答が多いが，「近所の人とあいさつしている」，「近所の大人から注意されたことがある」，「家の人と一緒にスポーツをした」は，男子のほうが肯定する回答が多い。中学生サンプル（表3）でも同様に，ほとんどの独立変数について女子のほうが肯定する回答が多いが，「近所の大人から注意されたことがある」と「山や森，川や海など，自然の中で遊んだ」は，男子のほうが肯定する回答が多い。高校生サンプル（表4）でも女子のほうが肯定する回答が多いが，男子が上回るものも多くなっている。具体的には，「近所の大人から注意されたことがある」，「将来，育った地域に住みたい」，「山や森，川や海など，自然の中で遊んだ」「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した」，「家の人と一緒にスポーツをした」は，男子のほうが肯定する回答が多い。

過去の体験については，既に述べたように，いずれのサンプルにおいても小学生のときのことを質問しており，ここで見たサンプル間の過去の体験の差は世代差ということになるだろう。すなわち，以前の世代（高校生サンプル）では，男子のほうが女子より多くの体験をしていたという意味で世代差があることがわかる。

表 4　高校生サンプルの記述統計（平均値，標準偏差）

	男女 N＝1202	男子 N＝594	女子 N＝608
レジリエンス得点	0.00（1.85）	−0.18（1.87）	0.18（1.81）
家族と学校などでの出来事を話す	3.25	3.08	3.41
家族に困ったこと・悩みを話す	2.82	2.64	3.00
家族は仲の良い友達の名前を知っている	3.39	3.29	3.49
家庭・地域・学校で大切にされていると感じる	3.26	3.22	3.29
親や大人は自分のことをわかってくれる	3.11	3.10	3.12
親や大人は自分のことを決めるとき意見を聞いてくれる	3.51	3.48	3.54
自分のことが好き	2.54	2.64	2.45
新しいことにチャレンジするのが好き	3.08	3.14	3.02
夢や将来の希望がある	1.67	1.62	1.71
女子	0.51		
近所の人とあいさつしている	0.88	0.86	0.89
近所の大人からほめられたことがある	0.69	0.66	0.72
近所の大人から注意されたことがある	0.23	0.31	0.16
将来，育った地域に住みたい	0.53	0.54	0.52
赤ちゃんとふれあった	0.66	0.63	0.69
小さい子どもと遊んであげた	0.73	0.70	0.77
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.84	0.88	0.81
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.87	0.88	0.87
家の人と一緒にスポーツをした	0.71	0.74	0.68
家の人に勉強を教えてもらった	0.59	0.55	0.62
家事や手伝いをしている	0.60	0.58	0.62

（　）内は標準偏差。

3.2　レジリエンスへの影響の推定結果

表 5 は小学生サンプルの推定結果である。男女計および男女別の推定で有意になっている変数はすべて係数が正であり，レジリエンス得点を高める要因であることがわかる。男女計の推定では女子ダミーの係数は正になっているものの有意でなく，男女差があるとは言えないという結果となっている。また，男女計と男女別の推定では，有意になっている変数にはいくつか違いがあることがわかる。そこで，女子ダミー以外の独立変数については男女別の推定結果から述べる。男子と女子を分けた推定からは，レジリエンスを高める多くの要因は男女共通であることが示されている。すなわち，「近所の人とあいさつしている」，「近所の大人からほめられたことがある」，「将来，育った地域に住みたい」，「家の人と一緒にスポーツをした」，「家の人に勉強を教えてもらった」に肯定的に回答した場合，レジリエンス得点が有意に高くなっている。男女で有意性に差があるのは，「小さい子どもと遊んであげた」と「山や森，川や海など，自然の中で遊んだ」が男子のみ有意で，「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した」が女子のみで有意である。男子で最も効果が大きいのは「家の人と一緒にスポーツをした」（1.13）であり，女子で最も効果が大きいのは「家の人に勉強を教えてもらった」（1.26）であった。「近所の大人から注意されたことがある」と「赤ちゃんと

表5　小学生のレジリエンス得点に関する推定結果（OLS）

	男女	男子	女子
女子	0.09		
	(0.09)		
近所の人とあいさつしている	0.61 ***	0.57 *	0.64 **
	(0.19)	(0.30)	(0.25)
近所の大人からほめられたことがある	0.72 ***	0.81 ***	0.57 ***
	(0.11)	(0.16)	(0.16)
近所の大人から注意されたことがある	−0.02	−0.17	0.18
	(0.12)	(0.15)	(0.19)
将来，育った地域に住みたい	0.54 ***	0.65 ***	0.38 ***
	(0.10)	(0.15)	(0.15)
赤ちゃんとふれあった	0.04	−0.15	0.22
	(0.11)	(0.15)	(0.17)
小さい子どもと遊んであげた	0.19 *	0.32 **	0.12
	(0.11)	(0.15)	(0.17)
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.27 **	0.48 ***	0.21
	(0.12)	(0.17)	(0.16)
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.08	−0.27	0.35 *
	(0.14)	(0.19)	(0.19)
家の人と一緒にスポーツをした	0.74 ***	1.13 ***	0.43 ***
	(0.11)	(0.17)	(0.15)
家の人に勉強を教えてもらった	1.00 ***	0.82 ***	1.26 ***
	(0.13)	(0.18)	(0.21)
家事や手伝いをしている	0.47 ***	0.31 **	0.66 ***
	(0.11)	(0.15)	(0.16)
定数項	−3.86 ***	−3.81 ***	−4.00 ***
	(0.25)	(0.36)	(0.35)
対象数	1225	604	621
決定係数	0.28	0.34	0.28
調整済み決定係数	0.25	0.29	0.23

Note：すべての推定式は居住市町ダミーを含んでいる。（　）内は標準誤差。OLS = ordinary least squares.
$^{***}p<0.01$，$^{**}p<0.05$，$^{*}p<0.1$.

ふれあった」は，男女とも推定された係数は有意ではないことが示されている。また，決定係数は男子が 0.34 で女子が 0.28 となっており，ここで取り上げた要因では男子のレジリエンスのほうがよく説明できることもわかった。

表6は中学生サンプルの推定結果である。男女計の推定では，女子ダミーが正で有意になっており，使用した独立変数の影響を取り除いても，女子のほうがレジリエンスが高いという意味で男女差があることがわかる。小学生サンプルと同様に，有意になっている変数はすべて係数が正であり，レジリエンス得点を高める要因が明らかになっている。また，男女計と男女別の推定結果で有意性の有無に違いはまったくない。すなわち，「近所の人とあいさつしている」，「近所の大人からほめ

表6　中学生のレジリエンス得点に関する推定結果（OLS）

	男女	男子	女子
女子	0.14 *		
	(0.08)		
近所の人とあいさつしている	0.56 ***	0.60 ***	0.51 **
	(0.16)	(0.23)	(0.24)
近所の大人からほめられたことがある	0.81 ***	1.00 ***	0.67 ***
	(0.10)	(0.14)	(0.14)
近所の大人から注意されたことがある	−0.05	−0.07	−0.02
	(0.10)	(0.13)	(0.16)
将来，育った地域に住みたい	0.49 ***	0.44 ***	0.52 ***
	(0.08)	(0.12)	(0.12)
赤ちゃんとふれあった	−0.03	−0.13	0.04
	(0.10)	(0.13)	(0.15)
小さい子どもと遊んであげた	0.06	0.10	0.02
	(0.10)	(0.13)	(0.15)
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.09	0.22	0.02
	(0.10)	(0.16)	(0.14)
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.62 ***	0.72 ***	0.45 ***
	(0.11)	(0.15)	(0.15)
家の人と一緒にスポーツをした	0.54 ***	0.62 ***	0.44 ***
	(0.10)	(0.14)	(0.13)
家の人に勉強を教えてもらった	0.76 ***	0.51 ***	0.97 ***
	(0.09)	(0.13)	(0.13)
家事や手伝いをしている	0.43 ***	0.50 ***	0.38 ***
	(0.09)	(0.12)	(0.12)
定数項	−3.21 ***	−3.43 ***	−2.84 ***
	(0.17)	(0.23)	(0.25)
対象数	1675	838	837
決定係数	0.32	0.36	0.31
調整済み決定係数	0.30	0.33	0.28

Note：すべての推定式は居住市町ダミーを含んでいる。（　）内は標準誤差。OLS = ordinary least squares.
$^{***}p<0.01$，$^{**}p<0.05$，$^{*}p<0.1$.

られたことがある」，「将来，育った地域に住みたい」，「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した」，「家の人と一緒にスポーツをした」，「家の人に勉強を教えてもらった」に肯定的に回答した場合，レジリエンス得点が有意に高くなっている。男子で最も効果が大きいのは「近所の大人からほめられたことがある」（1.00）と，小学生とは異なる要因になっている一方，女子で最も効果が大きいのは「家の人に勉強を教えてもらった」（0.97）であり，こちらは小学生と同じ要因となっている。その他の要因については，「近所の大人から注意されたことがある」，「赤ちゃんとふれあった」，「小さい子どもと遊んであげた」，「山や森，川や海など，自然の中で遊んだ」は，男女とも推定された係数は有意ではない。また，決定係数は男子が 0.36 で女子が 0.31 となっており，小学生の推

表７　高校生のレジリエンス得点に関する推定結果（OLS）

	男女	男子	女子
女子	0.35 ***		
	(0.10)		
近所の人とあいさつしている	0.67 ***	0.50 **	0.84 ***
	(0.15)	(0.21)	(0.21)
近所の大人からほめられたことがある	0.61 ***	0.60 ***	0.61 ***
	(0.11)	(0.16)	(0.16)
近所の大人から注意されたことがある	0.17	0.20	0.16
	(0.11)	(0.15)	(0.18)
将来，育った地域に住みたい	0.59 ***	0.67 ***	0.52 ***
	(0.09)	(0.14)	(0.13)
赤ちゃんとふれあった	−0.08	−0.05	−0.02
	(0.11)	(0.16)	(0.16)
小さい子どもと遊んであげた	0.12	0.35 **	−0.15
	(0.12)	(0.17)	(0.18)
山や森，川や海など，自然の中で遊んだ	0.05	0.23	−0.07
	(0.13)	(0.22)	(0.18)
家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した	0.25 *	0.22	0.28
	(0.15)	(0.22)	(0.21)
家の人と一緒にスポーツをした	0.63 ***	0.68 ***	0.60 ***
	(0.11)	(0.17)	(0.16)
家の人に勉強を教えてもらった	0.86 ***	0.75 ***	0.93 ***
	(0.10)	(0.15)	(0.14)
家事や手伝いをしている	0.36 ***	0.37 ***	0.29 **
	(0.09)	(0.14)	(0.13)
定数項	−3.00 ***	−3.18 ***	−2.52 ***
	(0.19)	(0.27)	(0.27)
対象数	1202	594	608
決定係数	0.31	0.33	0.32
調整済み決定係数	0.29	0.29	0.28

Note：すべての推定式は居住市町ダミーを含んでいる。（　）内は標準誤差。OLS＝ordinary least squares.
$^{***}p<0.01$，$^{**}p<0.05$，$^{*}p<0.1$.

定結果と同じように，ここで取り上げた要因では男子のレジリエンスのほうがよく説明できることもわかった。

表７は高校生サンプルの推定結果である。男女計の推定では，中学生サンプルと同じように女子ダミーが正で有意になっており，独立変数の影響を取り除いても，女子のほうがレジリエンス得点が高いことがわかる。これまでの推定と同様に，有意になっている変数はすべて係数が正であり，レジリエンス得点を高める要因がわかった。また，小学生サンプルと同様に，男女計と男女別の推定結果で有意性の有無に少しではあるが違いがある。そこで，女子ダミー以外の独立変数については男女別の推定結果から述べる。男子と女子を分けた推定からは，レジリエンスを高める多くの要

因は男女共通であることがわかる。すなわち,「近所の人とあいさつしている」,「近所の大人からほめられたことがある」,「将来，育った地域に住みたい」,「家の人と一緒にスポーツをした」,「家の人に勉強を教えてもらった」に肯定的に回答した場合，レジリエンス得点が有意に高くなっている。男女で有意性に差があるのは,「小さい子どもと遊んであげた」が男子のみ有意で，女子のみで有意になった変数はない。男女とも最も効果が大きいのは「家の人に勉強を教えてもらった」(男子 0.75，女子 0.93）で，男子は小学生とも中学生とも異なるが，女子は一貫して同じ要因となっていることが示されている。男女とも共通して有意でなかったものは「近所の大人から注意されたことがある」,「赤ちゃんとふれあった」,「山や森，川や海など，自然の中で遊んだ」,「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した」となっている。また, 決定係数は男子が 0.33 で女子が 0.32 となっており，小中学生の推定結果と同じように，ほんのわずかではあるが，ここで取り上げた要因では男子のレジリエンスのほうがよく説明できることもわかった。

4. 議論

本研究の分析結果から，地域との関わりという視点からは，小学生，中学生，高校生さらに男女のいずれにおいても，レジリエンス得点を高めるのは「近所の人とあいさつしている」,「近所の大人からほめられたことがある」,「将来，育った地域に住みたい」であることがわかった。地域とのポジティブな関わりや地域へのポジティブな気持ちはどの発達段階であっても，レジリエンスを高めることが明らかになった。4 つの指標のうち 3 つで有意になっており，どの要因も独自の影響力を持っていることがわかる。したがって仮説 1a は支持されたと言える。一方,「近所の大人から注意されたことがある」については，負の係数も見られたが有意ではなく，レジリエンスを高めも低めもしないことが示唆された。以上の結果から，子どものレジリエンス向上のためには，地域からのサポートが重要な要因であることが示された。また,「将来，育った地域に住みたい」ことがレジリエンス得点と有意な正の関係を持っていることは，地域に愛着を持てるような教育や地域での取り組みも，子どもたちの健全な発達において重要であることが示された。同じ三重県のデータを使った水落（2014）においても，小学生，中学生，高校生のいずれも，地域との関わりから自信や自己肯定感にポジティブな影響を受けていることが明らかになっており，異なる時点のデータを使った本研究でも，そうした効果があることが確認された[2)]。

もう一つの分析視点であった過去の体験という点からは，小学生，中学生，高校生さらに男女のいずれにおいても，レジリエンス得点を高めるのは「家の人と一緒にスポーツをした」,「家の人に勉強を教えてもらった」という家族との関わりであることが示された。幼いころにできるだけ家族とともに運動や勉学に取り組むことが重要であると言える。また, サンプル間で安定的な結果とはなっていないが，小中学生では「家の人と一緒に地域の祭りや行事に参加した」ことも，レジリエンスを高めることが示されており，こうした勉学以外の体験も同様に重要であることが示されている。したがって仮説 1b も分析結果から支持されたと言える。赤ちゃんや自分より小さい子ども，自然に触れ合うことは，それ自体は大切な経験であり，先行研究でもレジリエンスを高めるという結果も示されていたが[大谷・佐々木 2020]，本研究の分析ではあまり関係ないことも明らかになった。

2）「近所の大人から注意されたことがある」は，水落（2014）でも有意な結果とはなっていない。

3つ目の研究視点であった発達段階による違いについては，レジリエンスに影響する要因にやや違いがあるものの，基本的には同じであることも本研究の分析によって明らかになった。したがって，仮説2は支持されたとは言えない。ただし，この結果から，子どもたちのレジリエンスの向上のために，発達段階でアプローチを大きく変える必要がないことが示されたことは重要であろう。

本研究の限界としては，主として2つあげられる。第1に，既に述べたように，本研究ではレジリエンスの規定要因に関する分析を行っているものの，先行研究で用いられているような標準的なレジリエンス尺度［小塩他 2002］を用いていないことである。したがって，標準的なレジリエンス尺度を使った分析による結果の確認が必要である。第2に，コントロール変数が十分でないことである。例えば，家族構成や親の就業状態，経済水準などはレジリエンスおよび本研究で使用した独立変数の双方に影響することが考えられ（交絡要因），推定結果に偏り（バイアス）をもたらしている可能性がある。この点についても改善が必要であろう。

5. おわりに

本研究では，子どものレジリエンスに関連しうる要因として，地域との関わりと過去の体験に注目し，また発達段階によって，そうした要因の影響が異なるのかを三重県で行われた調査データを用いて検証した。回帰分析の結果，地域との関わりおよび過去の体験のうち，いくつかの要因は子どものレジリエンスを有意に高めることが明らかになった。また，こうした影響は小学生，中学生，高校生の各発達段階でそれほど異ならないことも明らかになった。近年の子どものレジリエンスに対する注目が高まる中，こうした分析結果が，今後の子どもたちのレジリエンス向上に資することを期待したい。

謝辞

三重県子ども・福祉部少子化対策課より，子ども調査の個票データを提供していただいた。記して感謝申し上げる。

参考文献

【英文】

Hiew, C. C., Mori, T., Shimizu, M., & Tominaga, M., 2000 “Measurement of Resilience Development: Preliminary Results with a State-Trait Resilience Inventory”, *Journal of Learning and Curriculum Development* 1: 111–118.

OECD, 2019 *Changing the Odds for Vulnerable Children: Building Opportunities and Resilience*. Paris: OECD Publishing.

【邦文】

石毛みどり・無藤隆 2005「中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連―受験期の学業場面に着目して―」『教育心理学研究』53(3)，356–367.

石毛みどり・無藤隆 2006「中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連」『パーソナリティ研究』14(3)，266–280.

大谷哲朗・佐々木太朗 2020「児童期における自然体験活動とレジリエンスの関連」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』6，45–51.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性―精神的回復力尺度の作成―」『カウンセリング研究』35(1)，57–65.

小林朋子・渡辺弥生 2017「ソーシャルスキル・トレーニングが中学生のレジリエンスに与える影響について」『教育心理学研究』65(2)，295–304.

小林朋子 2021「学校教育を活かした子どものレジリエンスの育成―学校危機の予防と回復を支えるアプローチ―」『教育心理学年報』60，155–174.

齊藤和貴・岡安孝弘 2009「最近のレジリエンス研究の動向と課題」『明治大学心理社会学研究』4，72–84.

榊智子・吉田美里・石田敦子・村松常司 2016「小学生のレジリエンスと生活習慣との関連」『東海学校保健研究』40(1)，15–23.

田中千晶・兒玉憲一 2010「レジリエンスと自尊感情，抑うつ症状，コーピング方略との関連」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』9，67–79.

服部祐兒・石田敦子・村松常司・廣美里・廣紀江・服部洋兒 2014「高校生のレジリエンスと生活習慣との関連」『東海学園大学研究紀要』19，91–101.

原郁水・古田真司 2013「小学生のレジリエンスとつらい経験・うれしい経験との関連」『東海学校保健研究』37(1)，77–87.

原郁水・古田真司 2016「自己理解を促す保健指導が児童のレジリエンスに与える影響の検討」『愛知教育大学研究報告：教育科学編』65，53–59.

三重県子ども・福祉部少子化対策課 2019『みえの子ども白書 2019』三重県.

水落正明 2014「子どもの自信・自己肯定感の形成と家庭・学校・地域」『南山経済研究』29(2)，87–98.

森敏昭・清水益治・石田潤・冨永美穂子・Hiew, C. C. 2002「大学生の自己教育力とレジリエンスの関係」『学校教育実践学研究』8，179–187.

Children's resilience, local community, and past experience

Masaaki Mizuochi

要　旨

本研究では，子どものレジリエンスに対して，地域との関わり方や過去の体験がどのような影響を与えているかを実証的に明らかにした。データには，三重県の小学生，中学生，高校生に対して2018年に行われたアンケート調査を用いた。9つの質問に対する回答から構成されるレジリエンス得点を従属変数にした回帰分析を行った結果，以下のことがわかった。第1に，地域との関わり方および過去の体験のうち，近所の人にほめられたことがある，家の人と一緒にスポーツをしたなど，いくつかの要因は，子どものレジリエンスを有意に高めることが明らかになった。第2に，こうした要因の影響の有無は小学生，中学生，高校生の各発達段階，さらには男女間でおおむね同じであることも明らかになった。こうした分析結果は，子どものレジリエンス向上に取り組むにあたって有益な情報をもたらすと考えられる。